

硫
黃
島

菊
村
到
著

硫
黃
島

菊
村
到

硫 黄 島

著 者 略 歴

大正14年神奈川県に生まる。
昭和23年早稲田大学英文科卒業直
ちに読売新聞社に入社。現在社会
部記者。第37回芥川賞受賞
現住所
東京都世田谷区弦巻第2住宅745

昭和三十三年九月十日 印刷
昭和三十三年九月二十日 発行

定価 二五〇円

著 者 菊 村 到

発行者 車 谷 弘

印刷者 長 久 保 慶 一

発 行 所 文 藝 春 秋 新 社

東京都中央区銀座西八ノ四
板橋口座東京七八七四三番

万一落丁乱丁の際は、お買求めの書店又は発行所にてお取換致します
印刷 大日本印刷
製本 矢嶋製本

目次

硫黄島		七
不法所持		四九
夜の檻の中で		一一三
事件の成立		一五七
ある戦いの手記		二二三

口繪 著者近影
撮影 秋山庄太郎
装幀 勝呂 忠

硫

黄

島

硫

黃

島

片桐正俊がはじめて私の前にあらわれたのは、一九五一年四月二十一日の夕方であつた。私たちは私のつとめさきである新聞社の應接室で顔をあわせた。そのときかれの着ていた、いくらかくたびれかけた紺サアジの背廣の肩さきにこまかな水玉がきらきらひかつていたのを、私はいまでもあざやかに思いうかべることができる。

「雨になつたんですね」と私は言つた。それは私のかれに對する最初の言葉だつたと思う。するとかれはそれがなにか自分の落度でもあるかのように肩をすくめて「ええ」と小さく答えた。かれはひどく顔色がわるかつた。髪の毛をみじかくかりあげていて、そのために四角い顔がよいけい角張つて見えた。一般に表情に乏しくて、ひかえめな静かな聲音で、多少もどかしそうに言葉をかきながらゆつくり話をすすめていく、そんな印象が、かれの生き方の不器用さを正直に

示しているようで、私はなんとなく好感をもった。かれの私をたずねてきた用件というのは、ひどく風変わりなものだつた。かれは言いだしにくそうにして、いつまでも、もじもじしていた。ときには苦しうに身をよじつたりするのだつた。かれは海軍上等水兵として、硫黄島にいたのだが、木谷という同じ階級の戦友と、終戦後もなお洞窟にたてこもつていて、一昨年二月にやつと歸國した、と語つた。

そういえば、土氣色にくすんでいて無表情でかたくな感じのかれの顔つきには思いあたるふしがあつた。私は一ヵ月ほど前にもフィリピンの山奥に立てこもつていて、ようやくこんど歸國したという兵隊に市ヶ谷の復員局で會つたばかりだが、そういった人たちに共通のある表情が片桐のうえにもひろがつているのに氣がついた。この種の人たちは、かれらがそのなかで住みついたジャングルの土や木や草や岩やすべてそれらのものとの一種の同化作用によつて、非人間的なもの、あるいは自然に似てくるのではないか。そんなふうに思われるのである。だからときどき妙に話の通じあわないようなところが出てきて、いらいらさせられてしまう。片桐正俊にもたしかにそういうところがあつた。

かれが用件をきりだしたとき、私は思わずひざをのりだしてしまつた。それは私をそうさせるだけのものをもつていた。けれどもかれがしやべりおわつたとき、私の胸にはいくつかの疑點のようなものがかたまつてぶつぶつ吹きだしてきていた。その用件というのはこういうことであつ

た。

片桐正俊は一九四四年二月一日、横須賀の武山海兵團に入團した。三ヵ月後、館山の砲術學校にはいつた。さらに三ヵ月たつと、かれは浦賀の防備隊にまわされ、その年の九月、硫黄島警備隊に編入されて横濱を出發した。かれが硫黄島に着いた時分はまだ空氣は、それほど切迫してはいなかつたが、十一月にはいると空襲もはげしくなり、ぐんぐん戦局はかたむきはじめ、ついに翌年三月、二萬數千名の日本軍將兵はほとんど死にたえてしまつたのである。そんななかにあつて、片桐は自分の生命をまもりとおし、木谷上水とふたりで終戦後さらに三年餘も穴居生活をつづけた。そしてこの期間にかれは大學ノオトに鉛筆で、せつせと日記を書きつづつた。それは米軍に投降するときまでつづいたのだが、投降するとき、そのノオトを岩穴にうずめてきた。こんど米軍當局の特別のとりはからいで、かれが單身硫黄島にわたり、その日記を掘りだしてくるこゝになつた。そのことを新聞記事としてとりあげてほしい、それがかれの用件のすべてであつた。私にはかれがいいかげんなことを言つてゐるとは思われなかつた。かれははじめから終りまで低いおしつぶしたような聲で、まだるつこいくらい時間をかけて、そういうことをしゃべつた。あるいはかれは昂ぶつてくる氣持をおさえようとしていたのかもしれない。かれの態度は、いくぶんものうげで、いくぶんなやましげで、そしていくぶんかなしげでさえあつた。私はなるべくかれの要求に應じたい、けれどもそのためにはなおいくつかのあいまいな點が残つてゐるような

ので、これをあきらかにしたいと言ひ、そのいくつかの疑點をつぎつぎにかぞえたててみせた。

それはこんなふうである。まず、日記をとりにかくというような全く個人的な必要のために、米軍當局が一介の日本人に渡島の許可をあたえることはありうるか。そのために片桐はどんな手續きをふんだのだろうか。おそらくは、いくつかの段階にわたつて當事者の出頭をしつこく要求するにちがいない當局との交渉の過程をどういう方法で踏みとおすことができたのか。もし渡島に成功したとしても、はたしてかれは日記をうすめた場所を、まちがいなく指摘できるかどうか。それができたとしても、その日記は地熱や風化に耐えてどの程度まで原形をとどめているだろうか。そんな日記をなんのために掘りおこさなければならぬのか。こんなにもあやふやでたよりない計畫に、やすやすと協力の手をさしのべるほど米軍當局は、ロマンチストぞろいなのだろうか。

片桐は私の問いかけに、身をかたくしてじつと聞きいつていたが、しずかに顔をおこし、言葉をまさぐりながらぼそぼそ答えた。第一の質問について、かれはジェエムス・ヘンドリックスというアメリカの放送會社に勤務する特派員がかれのためにはかつてくれた便宜のかずかずを述べた。かれはこのアメリカ人のことをくだけた氣やすさでジミイとよんだ。ジミイとはグアム島の捕虜收容所で知りあつたのだとかれは言つた。そのジミイはかれに硫黄島行きをすすめ、すべての手續きをかたづけてくれたあと、朝鮮戦線に飛び立つた。

うずめた場所については銀明水に近い野砲トオチカの岩穴だと言い、地図を書いて、日記のありかを示した。ノオトは乾パンをいれるゴム袋に包んで、嚴重に梱包しておいたから、原形はいちじるしくそこなわれることはまずないと思う。そう片桐は言つた。

「これがもしかしたら一ばん肝心な點だと思うんですが」と私は言つた。「なんのために日記をとりに行くんですか」

かれは恥ずかしそうに顔をゆがめて笑つた。「じつは、出来たら出版でも、と思ひまして。もつともそんなあつかましいことは、ともかくとして、あの日記をいちど手にとつてみたい、そんな氣持から——」

私がかれに職業を聞いたとき、かれはつぎのように答えた。「ぼくは昔は製罐工をやつていましたが、いまは鋳金のほうです。渡り職工のような生活でした。いろんなことがありましてね」かれはよわよわしい微笑をうすく口もとにうかべ、ため息をもらした。かれは江東區北砂町九丁目の平和莊というアパートに住んでおり、そこから北砂町六丁目の江東製作所という鋳金工場へかよつていた。そこでは主としてフライパンや鍋、バケツなどをつくつてゐるのだつた。私のかれのなかに町工場のもつてゐる鐵と鐵とのふれあう重いひびきだとか、さびた屑鐵の刺すような匂いなどを、聞いたりかいだりした。

日本軍が一應玉碎したとみなされていたあとも、なおかなりの数の日本兵が分散して洞窟のなかに立てこもっていた。片桐は、三井兵曹長以下六人のグルウブとともに、北地區海岸の陸軍機關銃トオチカの岩穴に身をひそめていた。かれらはひるまはじつとその岩穴にかくれていて、夜がこの凝灰岩でおおわれたシャモジ型の小さな火山島を、深い闇の底にのみこんでしまつてから、外へ這いだし、いまだはそれが唯一の仕事である食糧さがしに出かけるのだつた。それは、ひるま敵の眼をさけて洞窟の暗がり、じつとへばりついているときよりも、はるかに濃密に恐怖や戦慄にみちた時間のなかへ、かれらをはこびこんだ。

ある午後、かれらはその岩穴にうずくまりながら明瞭に敵の氣配を感じとることができた。片桐が通風孔に顔をおしあて外部をのぞき見たとき、かれのせまい視野のなかで、軍用犬をつれた數名の米兵がぎれぎれにゆれうごいた。片桐たちは岩肌を抱きこむようにして腹這いになつた。ふ、ふう、ふ、ふう、というセバアドの熱っぽい息使いがあららしく流れこんできた。犬は日本兵の匂いをもとめて、鼻づらを岩肌にこすりつけるようにして、かきまわっているらしい。米兵は大きな聲で何か言いあつていて、ときどき口笛がするどく鳴つた。岩を蹴りつける靴音が話し聲をかきみだしながら、にぶくひびいてくる。その洞窟の入口は大きな岩でふさいであつた。その岩穴に手をかけて揺りうごかそうとしているらしく、兩足に力をこめて靴底を岩にぎしぎしこすりつける音や、岩がわずかにきしんで、ボロボロ泥がこぼれ落ちるかすかなひびきだとかが

岩穴のおくふかくまで、つたわつてきた。けれどもそれはすぐにやんでしまつた。岩穴にこもつた熱氣が肌のうえを這いまわり、皮膚の内側にまでじとしみこんできて汗が全身からどつと吹きこぼれるのだ。のどはからからにかわいてしまつて口のなかはあつい火のかたまりを押しこまれてもしたようだつた。時間がどろどろにとけて、にかわのようにかれらをその岩穴のなかにねばつくく、とじこめてしまふかもしれないかつた。とつぜん岩の割れ目が火を吹いた。米兵が自動小銃をうちこんだのだ。彈丸は岩にあたり、陰氣な炸裂音とともにくだけ散つた。硝煙の匂いがゆるやかに壕のなかにひろがつた。米兵はそのまま立ち去つてしまい、時間はやつと動きをとりもどした。

「ちくしよう」と三井兵曹長が言つた。「ちくしようめ。このトオチカもあぶなくなつてきやつた。やつら感づいたにちがいねえ。ぼやぼやしてると爆雷で吹つとばされるか、火焰放射器で焼き殺されちまうぞ」

それからかれは片桐と木谷の名をよんだ。かれはふたりにできるだけ早く外へ出て、より安全な洞窟をさがしてこいと命じた。ふたりは顔を見合せた。片桐は暗がりのなかで汗にぬれた木谷の顔がぶきみにひかり、眼玉がぎらぎらしているのを見た。ふたりは入口の岩を、長い時間かかつて、ほんの少しずらし、からだをけずるようにしてその岩のすきまにすべりこませ、這いだした。ふたりは砲彈のためにえぐりぬかれた地面のくぼみや岩かげに身をかくしながら、焼けてど

すぐろくなつた砂のうえを這つていつた。かれらはやつとのことで短十二糎砲臺のあとにたどりついた。そこなら六人ぐらいはもぐれそうだつた。かれらがもとのトオチカの近くまで這い戻つてきたとき、すでにあたりは夕闇に包まれていた。そしてトオチカに近づくにつれて、異臭がするどく鼻孔をつきさしてきた。ふたりのいないあいだにそこで何かが起つたことはあきらかだつた。

片桐は岩と岩の割れ目に顔をすりよせて奥をうかがつた。すると脂の焼けこげたような臭氣が一そう濃厚に流れてきた。それは、うたがいもなく焼けた人間の皮膚の匂いだつた。かれは木谷と、入口の岩をずりうごかし、内部へふみこんでいつた。木谷がマッチをすつた。マッチの火はぼつともえあがり、ちろちろゆれながら、ほのぐらい視野のうちにいくつかの日本兵の焼死體を照らした。片桐はとつぜん全身ががたがたふるえだすのをおぼえた。

「見たか」とかれは木谷に言つた。「顔が焼けただれて、べろつとむけ落ちてたな」

「うん」と木谷は言つた。「腕がぼろきれみたいにこげてねじくれてたぞ」

片桐も火焰放射器をあびせかけられた經驗をもつていた。そのときの記憶が焼死體の匂いにたちまじつてよみがえつてきた。放射された火は、まるでそれ自體が明確な意志をもつた生きものみたいに、通風孔から、突風のようににはげしい唸りを生じて吹き込んでくる。火はグオウ、グオウとほえたてながら伸びたりちぢんだり、ひろがつたりとびあがつたりして、自由自在に岩肌を